

明治のガス事業(四)：福岡市を中心として

入江，寿紀
福岡地方史研究会

<https://doi.org/10.15017/13715>

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として．12，pp.120-131，1983-06-30．九州大学石炭研究資料センター
バージョン：
権利関係：



明治のガス事業 (四)

福岡市を中心として

入江 寿 紀

目 次

- 一、はじめに
- 二、欧米初期のガス事業
- 三、日本におけるガス事業の創設（以上第九号）
- 四、東京ガスの発展と横浜のその後
- 五、英米のガス事業発展
- 六、福岡県における初期のガス事業計画（以上第一〇号）
- 七、博多瓦斯株式会社設立
- 八、博多瓦斯の点火と開業当初の成績
- 九、博多瓦斯の事業拡張
- 一〇、福岡県下のガス会社統出
- 一一、明治末における九州のガス事業統出
- 一二、九州におけるガス事業の特質と経済情勢との関係（以上第一一号）
- 一三、明治末の日本におけるガス事業の特質
- 一四、わが国ガス事業の系統
- 一五、地方ガス事業の欠陥（以上本号）
- 一六、ガス市営と報償金
- 一七、ガス器具について
- 一八、ガスエンジン

十三、明治末の日本におけるガス事業の特質

英米のガス事業については五項で述べた通りだが、それに比べると、日本のガス事業の発展は実に貧弱なものだった。その差は、そのまま文明の遅れと国力の差を表している。試みに、明治三十三年から四十年に至る全国ガス会社数と資本金を、「工業之大日本」明治四十三年二月一日号から引くと、次のようになっている。

年	社数	払込資本金
三十三年	四	三、三〇二、四〇〇円
三十四	四	三、一三一、五〇〇
三十五	五	四、九一六、七九五
三十六	五	五、五四四、〇〇〇
三十七	四	六、六六七、〇〇〇
三十八	八	八、一〇六、〇〇〇
三十九	八	九、六八一、六一〇
四十	九	一三、四一三、三四〇
四十四、五	三	三八七〇、〇〇〇、〇〇〇
四十五	七	五

△注▽明治四十四年以降は筆者注記

この日本におけるガス事業の趨勢について、明治四十四年七月・岡

大蔵局長は次のように述べている。

明治四十年以前に於ける我國の瓦斯事業は実に微々たるものにて、明治三年横浜瓦斯局・同八年東京瓦斯局起りたるも、未だ会社組織又は個人経営としての瓦斯事業は之を見るを得ざりしが、其後十八年に至り東京瓦斯局の後身たる東京瓦斯会社の成立したるを嚆矢（初まり）とし、二十五年には横浜瓦斯局は横浜市に買収せられて市営となり、二十六年は長崎、三十二年は千葉県成田、三十四年は神戸、三十八年は大阪、三十九年は博多に会社の設立せられたるのみなりしが、四十年に至りて栃木のアセチリン瓦斯の起りたるを始めとし、四十二年以降増加の趨勢を呈し、本年五月迄に会社数三十八・資本金四千万円に達し、基供給する瓦斯量は実に一ケ年約二十五億立方呎に上り、メートルの数も亦約一万个に上りたり。（中略）而して、売買瓦斯の種類は石炭瓦斯・アセチリン瓦斯の順序にて、基取引金額は約五万円なり。

△注▽東京・横浜の瓦斯事業については、三・四項参照。大阪瓦斯株式会社は、明治二十九年二月創立（明治事物起原）、同三十五年九月米國瓦斯王ブレヂーと気脈を通じ資本四百万円をもって起工（明治三十五、九、四、万朝報）。なお以上の局長談の外、日露戦役後の好況の波に乗って名古屋瓦斯が設立されている。（工業之大日本、明治四十三年十一月一日号）。同社は明治三十九年十一月五日設立（東洋経済新報社、索引政治経済大年表）。

以上の局長談にも述べられているように、明治四十一年までは漸増にとどまっていた日本のガス事業も、四十二年以後は急激な発展を始めた。当時の状況を明治四十二年九月三十日の「福岡日日」は次の様に伝えている。

我国事業界は、紡績事業が頻りに活躍を策し居れるを除くの外未だ意氣銷沈の態を脱せざる昨今、瓦斯事業は各地方に企画され居る

もの甚だ多く、既に世界に表われ居るものゝみにても、仙台・門司・広島・四日市・豊橋・一の宮（愛知県）等の各市街にして、就中仙台瓦斯の如きは、東京筋有力者の発起に係り、資本金六十万円にして、開業後二割の配当を為し得る予定なり。

試みに、「工業之大日本」明治四十三年九月一日号から、同年七月ころのガス会社名を（一部筆者追加）挙げてみると、次のようなものがある。

東京、横浜、神戸、大阪、名古屋、岡山、仙台、静岡、門司、博多、一の宮、津島、知多、浜松、岐阜、京都、広島、尾道、堺、鹿児島、熊本、下関、新潟、姫路、高松、大牟田、和歌山、福山、宇都宮
以上の会社のうちには、設立はされたがまだ開業していないものや、一部には創立総会の月日は決っているがまだ設立には至っていないものが含まれている。

また、設計または企業中のものとして、次のものが挙げられている。
金沢、伏見、中津、大分、別府、福井、小倉、久留米

△注▽小倉は既設の誤り（参照十項）。

以上の情報は大部ラフなものようだが、当時のガス企業熱が全国的なものだったことだけは知ることができる。

ガス会社増加のため、帝國瓦斯協会結成が計画され、明治四十五年（一九二二）五月三十日東京瓦斯株式会社本社で創立総会が開催されている。

当時は、東京・大阪などの中央都市と地方とでは地域的な差や時期のずれはあったが、暗い不況が日本全土を包み込んでいた（参照十二項）。その暗い谷間の中でのわずかな光明が、ガスと電気だった。

不況だとは言っても、九州地方は少し事情を異にしていた。また、鹿児島のように特種な経済情勢の所もあった（参照十二項）。したがって、九州地方のガス事業熱をそのまま全国規模に拡大解釈することはできない。しかし、同じ日本国内のことだから、相互に影響し合っ

たことだけは確かだ。

以上の観点から、以下、明治末のガス事業が、当時の不況下であつて、なぜ活況を呈したかを、全国的な視野に立つて考えてみたい。

(一)、ガス事業独特の原因

イ、これは十一項で既に述べたことだが、九州地方におけるガス事業続出が博多瓦斯の営業成績向上に刺激されたと考えられるように、全国各地にガス事業が続出した原因の一つとして、「一の宮町」におけるガス事業成功のような例がいくつかあったのではないかと考えられる。

一の宮については、「工業之大日本」明治四十三年十一月一日号に述べられているので、そのまま引用することにする。

○日本に於ける瓦斯事業の新紀元

名古屋瓦斯の起るや、恰かも日露戦役の後を受け、社会の事物俄然として亢進沸騰せる好時機に至りしと雖も、夙に（早くから）異数の発展を示して、人をして瓦斯事業の将来を謳歌（声をそろえてほめたたえる）せしめたるもの、其間必ずしも設計の完全と経営の周到なるに依らずんば、~~勢ぞ能く~~此大成功を収むるを得んや。果せる哉、本社の業略其緒に就くに及んで、附近の小市街、即ち一の宮町に瓦斯の業を起さんとす。

一の宮町は、人口一万八千・戸数四千五百の小市街にして、特種の産業なく、遊覧すべき名所旧蹟の存するなく、僅かに機業（はた織り業）に就て多少見るべきものある、普通一片の小都会なり。此小都会に瓦斯事業を經營せんとは、是れ我国に於ける前代未聞の業にして、其成功と否とは、他の幾多の小市街に於ける総ての瓦斯事業の成否を卜すべき試金石にして、払込資本七万五千円は額に於い

て小なりと雖も、殆んど日本に於ける総ての瓦斯事業を支配すべき重大の運命を有せり。

而して其結果、世人の予想外に出て、或者は笑ひ、或者は患ひたるに係はらず、第二期の決算に於いて明かに一割の配当をなし得たるが如き博多瓦斯・神戸瓦斯の永く悲境に沈淪（しずむ。落ち入る）して日本の瓦斯事業発展に大なる障碍（障害）を与えたるに比して、正に靈壤の差あると見る。

之れより、日本の都市は、一斉に瓦斯事業の経営を出願するに至る。即ち一の宮瓦斯の成功は、日本の瓦斯事業に対し、一道の光明を与へ革命的機運を開きしものにして、余は是れを以て日本に於ける瓦斯事業の新紀元といふ。而して此設計・経営の任に当りしは、実に名古屋瓦斯株式会社・技師長兼支配人岡本桜氏なり。

○小瓦斯会社の岡本式経営法

岡本氏の名古屋瓦斯に従事するや、常に組織の簡約を主張し、他の技術者が単に外国の瓦斯事業を移植するに安んずる間に、如何にして瓦斯及瓦斯事業を日本化せんかに付て關心せり。其結果瓦斯器具の統一となり、日本風瓦斯器具の新案となり、小瓦斯会社の経営となる。瓦斯器具の統一は、会社の事務を簡明にし経費を省約し起業費を節減す。日本風器具の新案は、輸入税の負担を免かれ、器具を安価にし、日本の家屋趣味と調和し、従て瓦斯の需要者を増加す。其心慘憺（心を悩ます様）一朝にして論ずべきに非らざるなり。

若し夫れ岡本氏の成功を以て直に事業の安全健固を夢想するものあらば、そは大なる誤解なり。況んや曩に小都會の瓦斯事業を悲觀し、四十年間何等の企画をも為さざりし技術家・経営家が、争つて其弊に効はんとするが如きは実に危険千萬なるものにして、虎を画いて豹に類するの笑を残さん事を恐る。或いは是等輕薄の徒が、再び日本の瓦斯事業の将来を誤らん事を患ふるものなり。

殊に米國風の設計規模即ち割合に宏大なる設計を爲して、將來の發展擴張に供ふるものとし、之れを以て技術家の達觀の如く思考するものあるに至つては、寧ろ悲しむべき現象なりとす。

日本に於ける人口増加の割合・土地の盛衰等に関する統計は、明かに是等の必要條件を吾人に教ふるものにして、数十年の後に利益を収むるが如きは、言甚だ妙なるも、営利会社として到底忍ぶべきに非らざるなり。

是れ吾國工業の施設が従来往々小規模に失し、漸く其工を終る頃ひ既に其要求の幾分だも満たす能はざる事は屢々目撃する處にして、此反動的結果、所謂大規模設計に類似したるものにして、之れを以て直に瓦斯事業にも応用せんとするは、實に危険なりと言はざるべからず。

余は所謂小瓦斯会社の経営は、岡本氏に依て新生命を与へられしものにして、瓦斯事業に於いて尤も必要なる技術と経営との連絡を、遺憾なく実行したるものに非らざれば、決して全一の結果を得るべからざるなり。

従来日本の工業会社を見るに、技術者と経営者との間に殆んど連絡なく、技術者は常に其立場より立論して完全なる機械と極大量の設計を要求し、経営者は之れに反して、廉価なる機械と極少量の施設に甘んぜんとす。即ち、前者は學理に奔り、後者は利益を重んじ、其結果全体の事業に欠陥を生じ不成績に終るは、常に目撃する處にして、其之れを調和し設計と経営とを通じて両つながら全きを得んと欲せば、技術者にして経営の才を兼ねざるべからず。瓦斯の如き學理の尤も簡單なる事業に於いて、殊に其然るを見る。

独逸に於ける瓦斯技術なるものは、普通の工業教育を受けてより、更に瓦斯に関する特別の智識を授けらるゝ事僅かに一二年にして、直に技術者兼経営者として立つものなり。其如何に單純なるやを知

るに足らん。即ち岡本氏は、其長を採り短を捨て、是れを日本に応用し、支配人なく技師長なく、曰く庶務曰く會計曰く工務曰く何曰く何といふが如き、日本一流の繁文縟礼（形式が複雑で、手続きなどのわずらわしいこと）を廃して、尤も簡單なる小瓦斯会社の経営を案出したるものにして、余は是れを呼んで岡本式小瓦斯会社経営法といふ。

即ち岡本式経営法なるものは、工事の迅速・興業費の低安・経費の節減・事務の簡明・経営技術の連絡を以て主義綱領とするものにして、是れ只一の成功秘訣とす。

人或いは言はん、這般（こういつた）経営法なるものは、従来幾多の書籍が既に吾人に教ふる處にして、必ずしも岡本氏の新発見に非らずと。然り余も亦此経営法を以て斬新（斬新の誤り。きわめて新しい）奇抜なるものと言はず。只岡本氏が能く之れを運用実行したるを称せんのみ。若し夫れ實地に付て他の瓦斯会社と比較研究する人あらば、如何に興業費が低廉なりしか必ずや思半ばに過ぐるものあらん。京都と広島を対照せよ、門司と豊橋を対照せよ、尚進んで仙台と浜松を対照せよ。

○瓦斯事業界の新福音

我瓦斯事業四十年間の歴史は、將來の日本に於ける瓦斯事業を悲觀せしむる外、何物も吾人に与へざりき。従つて是れに對する機械の製造に付ても、何等の發展進歩を見るはざりしは、寧ろ當然なりと言はざるべからず。小は「マントル」の製造より、大は瓦斯溜の製造に至るまで、殆んど總てを外国製品に仰ぎ、是れに對して製造家が何等の施設をも爲さず、一人の企業家をも見ざりしは、單に大なる利益を此製作に依て収め得ざるに原因するのみならず、將來の發展を期待し予想し能はざりしに依らずんばあるべからず。

然るに、一の宮の成功が此事業に新紀元を与へしより、急激の發

展は、是等の製造業者をして、何等かの手段を講じ、輸入品に對抗して此間に多少の利益を収めん事を希望せしむるに至る。

然るに、俄かに技術者を欧米に派遣し設計製造の方法を講究するは、時機既に遅く、盗繩（泥棒を捕えてから、これを縛る繩をつくる）の讖を免かれず。袖手傍觀（自分からせずそばから見てゐる）の不得已に至らんとする時、岡本氏は自ら監督指揮の任に当り、名古屋両会社をして、瓦斯製出に要する殆んど總ての機械を製造せしめ、且つ自ら之れを使用し實際に於て有効安全なるを證明したり。此に於て各地の製造家は争ふて其製作に従事すると同時に、多年内地製品に向つて不安の念を抱ける技術者間に於ても、喜んで之れを採用するに至る。是亦実に岡本氏の功勞にして、瓦斯事業家に対する新福音と言はざるべからず。

總て機械の輸入は、関税一割五分を負担し莫大の運賃を支払ふものなるに、瓦斯機械中尤も高価なる瓦斯溜は、我輸入税法に依て実に從価二割五分を負担せざるべからず。然るに此福音と今時に此負担を免かれ、從來小瓦斯会社経営困難の一原因と称せられたる起業費の一部を削減（削減）するを得るなり。沉んや新税法は瓦斯溜を從量税に改正したる結果、從価三割を支払はざる可からざるに至る。然らば其此れに依て利する處幾千ぞ。豈大ならずとせんや。

口、この外、小資本で起業できたことも原因の一つと考えられるが、その説明は、十二項で述べたことのくり返しになるので、ここでは述べない。

(二) 電気事業と共通する原因

当時ガスと電気とが不況に強い業種だったことについては、長岡新吉著「明治恐慌史序説」二四六頁に述べられているので、ここでは触れない。ただこれは中央大手や小企業中一部優良会社についてだけ言

えることで、地方の群小ガス事業の大部分は、不況に強かつたとは言えない（参照、十四・十五項）。

以下ここでは、不況に強かつた原因について考えてみることにする。明治におけるガスと電気の利用は、灯用を主とした（参照十八項）。その外共に熱用・動力用もあったが、その使用量は少なかった。だから電気は、ガスの有力な競争相手であり、その外強敵として石油ランプがあった。ガスは電気に対しては、価格の低廉と、電気灯の発電量不足による光力の低下や故障多発により、電気灯の便利さを割引いても魅力があり、そのため電気事業発展の中にあつても着実に需要を増加して来た。石油ランプに対しては、値段が高くつくことや供給区域が限定される不利はあつたが、その明るさと便利さのゆえに遅れは取らなかつた（参照、拙稿、『エネルギー史研究ノート』第四集所収「明治期福岡地方石油史」二、（一）ランプ）。

ガス灯・電灯・石油ランプと、三つ巴ではあつたが、この三者はどのようにそれぞれ特徴を持ち、そのため三者三様に需要を伸ばしてきた。その理由は、灯火が人人にとって欠くことのできない必需品だったからだ。もちろん、蠟燭や行灯、俵約しようと思えば油を入れた受皿や竹筒に灯心をたらしただけでも用は足せる。しかし一度この文明の利器の便利さを知った人人にとっては、少ない数で我慢することは出来たが、無くてもすませると言う訳にはいかなくなってきた。だから新しい灯火についての知識が普及し、ガス管や電灯線が引かれ石油ランプを買えるようになると、これらの文明の利器は次々と生活の一部となってきた。

以上述べたことから分かるように、何もガスと電気が不況に強い體質を持つて生れてきた訳ではない。ただ当時、ガス灯・電灯と言う新しい生活必需品の普及時代だったために、好不況に左右されることが少なかったと言うに過ぎない。

(三)、ブーム時における附和雷同

このことについては十二項で述べたので、このことが全国的にも言えるということだけを付け加えておこう。

明治のガス事業が不況に強かった原因については、以上述べた通りだが、これらはそのままガス事業の特質となっている。

その外明治の地方ガス事業は、博多瓦斯などの例外は別として、一般に群小地場資本によるものが多かったようだ。しかもブームに便乗したお粗末な会社が多く、更に悪いことには、規模が小さいために副産物利用などと言う生産過程の合理化が出来ぬと言う弱点もあった。これらいくつもの原因が重なって、コスト高となり、経営を圧迫、更に中には電気事業との競争にまで敗れるという会社もあったようだ。この事については、資料が少なく推定の段階を出ないのだが、その例として豊州瓦斯を挙げてみよう。なおその反対例として、博多瓦斯も付け加えておくことにする。

○豊州瓦斯（明治四五、六、一七、福岡日日）

別府・大分間の点灯事業は豊後電鉄の独占事業に帰し、八百馬力の発電気にては電力の不足を訴へ、点灯申込は一切謝絶の姿なりしが、近來豊州瓦斯会社に依りて瓦斯灯は別府に点火され、大分市亦た二十日より瓦斯点灯の筈にて、一千個の申込ありと聞く。

右に付豊後電鉄電灯事業の上に及ぼす影響如何に付調査するに、別府町に於ての瓦斯需要者等は、最初は好奇的に多数の申込みあり。使用の結果は電灯以上の費額を要するより、再び電灯に変更するか、然らざれば其儘死灯とし極めて必要の場合の外使用せざるものゝ如し。大分市或は此の轍（例）を踏み多くの死灯を出すとせば、別に挙げて称すべき影響なかるべしと。

○博多瓦斯（大正一、一一、一三、福岡日日）

九州電灯鉄道株式会社（博多電灯の後身）は、曩に会社の島田浅太郎・高橋吉之助両氏をして、社外に移し新に電機商会なるものを組織せしめ、十月十日より三十日間無代取付けの大活躍を開始せしめたる結果、同期間に七千二百余個の増加を来たし、目下三分の二余の取付を終り、今月中には全部を完了せしむる予定なるが、之に先月十日現在の四万一千四百十の灯を加ふれば現在灯数殆ど五万灯に垂んとする有様なるも、今後猶此好成绩を持續し得べきや大なる疑問にして、此辺或いは一段落を告げたるにあらざるなきか。

斯の如き電灯の増加は瓦斯に多大の影響を及ぼすべく思惟さるれども、事実は之に反し、殆ど何等の痛痒（痛みとかゆみ）も感ぜず、瓦斯も亦相応の発展をなしつつあり（以下略）。

この例からも分かるように、地方群小ガス会社の中には、着着と利益を増加してきた一の宮や博多などの会社がある一方で、明治時代に既に電気との競争にまで負けた会社さえあった。多くのガス会社が、大正に入り第一次大戦が始まると、その急激な変化に耐えきれず消滅していったが、その原因は持って生まれた性格にあった、と言えそう

十四、わが国ガス事業の系統

日本における地方ガス事業は、その創設に当って、博多瓦斯が東京瓦斯に依頼したように、どこかモデル会社に依頼するのが例となっていた。東京が良いと思う者は東京に、大阪が良いと思うものは大阪に、名古屋が良いと思う者は名古屋に依頼して、会社を設立した。

この様なことは何もガス事業に限ったことではなかった。それは、当時日本の工業技術が未熟で、経験者が少ないことから起こった。そのため進歩した欧米の機械や設備を採り入れようとしても、外人技師

を招いたり経験のある工学士などを軸にしたり、町工場などでは経験のある職工を引き抜いたりしなければ、たとえ機械や設備だけは整っても、これを運用することが出来なかった。その中でも特にガス事業は、既設の会社がきわめて少なかったから、技師や職工の数も限られ、しかも地方の群小資本会社では外人技師を雇う余裕もなく、先進会社の応援がなければニツチもサツチも行かなかったのだと思う。

このようにして、設計その他に付いて指揮を仰ぐので、やがてこれが東京系だとか大阪系だとかに分類されることになった。その間に資本の関係もあつたが、それはあまり問題にはならなかったらしい。ガス事業が設立当初から系列づけられていたことが、大正初期ガス事業統合の原因となっているようだ。

しかしそのような系列の中にも、「或る意味より言へば、名古屋瓦斯の如きは、資本の関係上当然東京系に属すべきものなれど、今日殆んど相互提携の関係なく、殊に名古屋瓦斯会社技師長岡本桜氏が、千代田瓦斯会社（東京）の技師長として東京瓦斯に対抗して、競争の正面に立ちつゝあるが如き、多少奇異の感なくんばあるべからず。而して其内部を見るに、名古屋瓦斯は東京瓦斯と同一の代表者を有し、千代田は又名古屋と同一の代表者を有す。而して千代田と東京は、犬猿も啻ならざる状態に在り。豈奇なりと言はざる可けんや。」（「工業之大日本。明治四三、一二、一号」）（青木止貞稿）と言うような奇妙な関係が伏在していた。

このようにしてできたガス事業の系統を、「同紙」から引用すると次のようになっていた。△注▽一部筆者追加。

▲第一、東京系に属するもの

△主な技術者 平松末吉、水田政吉、上田太吉、内藤游

△系統会社 東京、横浜、博多、仙台（あるいは名古屋系）、静岡、

岡山、門司、岡崎、長崎

▲第二、名古屋系に属するもの

△主な技術者 岡本桜

△系統会社 名古屋、千代田、一ノ宮、津島、知多、豊橋、浜松、岐阜、奈良、京都、伏見、小倉、金沢、彦根、鯖江、武生、三国、中泉見附、江尻、清水

▲第三、大阪系に属するもの

△主な技術者 下村孝太郎

△系統会社 大阪、堺、広島Ⅱ尾道、神戸（但し初め東京に属し現在大阪系に入る）

▲第四、日本系に属するもの

△主な技術者 原専造

△系統会社 鹿児島、熊本、下関、新潟、高松、姫路、和歌山、宇都宮、大牟田、福山

なお、名古屋瓦斯およびその系統会社についての（「同紙」明治四四、一、一のニュースを、参考のために挙げておこう。

最近名古屋市の戸数八万七千余に対する瓦斯の使用者は一万一千三百余戸、実に全戸数の八分の一強に及びて、動力用（百五十余戸）を除き燈熱用の一戸一日の平均使用高は二十四・五立方メートルにして、中にも名古屋郵便局の如きは一日一万五千立方方を使用しつゝある有様にして、一日の総供給高は四十三万立方方以上であり、而かも今日の状勢より推さんか、今後の一年間には尚ほ優に一日二十万立方方を多く供給するの見込みあり。利益の大なるを以て知るべく、本期は一割の配当をなして尚ほ二万余円の積立及び繰越金を剩せり。尤も是れ単り名古屋に止まらずして、開業以来一年に垂んとする一宮瓦斯・津島瓦斯の如きさへ八朱の（八分）配当をなし、豊橋瓦斯は六朱四厘を配当し、浜松瓦斯（五十万円、四分の一払込）の如きは営業期日僅に廿日間にして尚且四千円の利益を収め得たりと

云へり。

斯の如く瓦斯事業の有利にして有望なる為、近來到る處瓦斯事業の計画さるゝもの極めて多く、殊に最近経済的組織の範を示したる名古屋瓦斯会社を中心としての経営発起さるゝもの其の数十五会社・資本金七百万円に達せり(十二月二十二日)。

▲名古屋瓦斯会社(二百万円、五分の四払込) ▲豊橋(五十万円) ▲知多(五十万円) ▲浜松(五十万円) ▲一宮(三十万円) ▲津島(二十万円) ▲仙台(五十万円) (以上四分の一払込開業す)
▲岐阜(六十万円、明年三月開業) ▲奈良(五十万円、明年一月十六日創立總會) ▲小倉(二十万円、明年一月開業) ▲彦根(二十万円) ▲鯖江(二十万円) ▲武生(二十万円) ▲三国(二十万円) ▲中泉見附(二十万円) ▲江尻清水(二十万円) (以上出願中又は準備中)
日本のガス事業は、最初の間は、東京・大阪・名古屋の各ガス会社(参照前項)の系統に属していた。しかし、日本瓦斯株式会社が設立されてから、事情が変ってきた。同社の性格については、「工業之大日本」明治四三、一二、一号に「カール、 فرانケ日本支社、青木止貞」の論稿があるので、これを引用する。

○日本瓦斯株式会社

日本に於ける種々なる組織の瓦斯事業を論じたる余は、今此に日本瓦斯株式会社の組織に就て説明するの要を感ず。

同会社は、明治四十三年四月を以て設立せられ、資本金二百万円を有し、其四分の一即ち五十万円の払込を了れり。

▲筆者注ノ発起は、福沢桃介・松永安左衛門、ほか。

定疑に依て之を見るに、同社の営業目的は、

日本国内枢要の地に於て

一、点灯・火熱・動力の需要に應ずる為め瓦斯製造販売し、兼て之れに關聯して副生物の製精販売を為す事。

二、瓦斯事業を引受け、之れを経営する事。

三、他の瓦斯会社の株式を所有する事。

但し、代表として其会社の取締役・監査役を選出するところあるべし。

にして、現今、第一項の如き自己直営の瓦斯工場を有せずとも、鹿児島・熊本・下関・新潟・姫路・高松・大牟田・宇都宮・福山・和歌山等に於て各瓦斯会社の株式の半数或は以上を所有し、代表として各会社に取り締役・監査役を撰出す。即ち第三項の目的を實行しつゝあるものなり。又一方に於て是等の各瓦斯会社の工事・設計等を引受け、事業に着手しつゝあるは、第二項の一部を實行するものなり。

此の組織は、是等の営利会社に於て全く新規なる企画にして、一種の放資団体とも見るべく、而かも単に放資を以て本来の目的となすに非らずして、事業其物に興味を有する企業が同種の事業の特別の聯合を形成しつゝあるものなり。然れども従來欧米諸国に見られつゝある聯合、即ち米国の「コンピビション」・白耳義(ベルギー)の「シンジケート」・独乙の「カーテル」の如く、各同業者間に一定の規約を結び、経済的行為の制限の下に各自独立して営業するものと、少しく其趣旨を異にし、出資の關係上、日本瓦斯会社は中央部即ち集注的に、経営執行に任ずる傾向あり。此点に於ては寧ろ英米の「トラスト」・仏国の「ブリージョン」の採れる中央集權制に似たり。

要するに現在会社の状態は、或る到着点に達する一種の徑路にして、將來實際の聯合として成文の規約を見るに至るや、果た又合同として中央集權の下に統一的经营を行はるゝやは未定の問題なり。勿論、経営者中の胸中既に是れに対する成算あるべしと雖も、日本人の特質たる地方的感念は、俄かに此新経営に傾倒一致する事を許さず、徐々に誘導説明するの不得已状態に在りといふべし。然れども

余は、本社経営の最後の目的が、大結合即ち「アヌルガメーション」或は「コンソリテーション」に在る事を信ぜんと欲するものなり。

何となれば、若し本社の事業を以て、単に聯合を意味し、合同を標榜（旗じるしとする）するに止まらしめば、其之れを必要とする原因、即ち相互の競争より生ずる損失の予防策を以て第一の目的とせざる可からず。然るに本社の關係せる各瓦斯事業の間に於て競争なるものは有り得べからざる事実にして、此点に於て其必要を認めざるなり。若し此事業が工場商業即ち貨物商業たる時は、聯合・合同共に急務場合多々あるべし。日本瓦斯の事業に於て更に其理由を認めざるなり。

余を以て之を見れば、本社の事業は其最終に於て近世的大経営の利益より打算し、其危険分担の範圍を拡大し、同種の事業の統一的経営を行ひ、地方的事業をして其危険の分担を一地方に止めしめず、殊に株式会社の特質たる資金の運輸作用を増大せしめ、（地方の株式会社の株式の運輸殆んど其地方に止まり、日本瓦斯としての株式は中央市場に運輸す。）事業の安全を期すると同時に、多大の利益を出資者に提供せんとするに外ならず。

而して、日本瓦斯の此経営法は、他の貨物商業と異り、屢々米国に於て問題の焦点となれるトラスト政策の如く、何等の害毒を社会に流す事なし。舊に害毒を流さざるのみならず、其組織の完成なる時、日本に於て空前なる公共事業の合同経営にして、之れを経済上より論ずるも、或は社会政策上より論ずるも、尤も完全なるものと云はざるべからず。若し之れに加ふるに供給機関の完備せるあらば、独乙の所謂企業者「カーテル」の如く、共同購買に依て原料其他を廉価に購入するを得、生産費を節減して利益を増大する事益々大なるを信ず。

日本瓦斯の性格は以上のようなものだが、同社は、大正に入り九州

のガス事業統合に大きな役割を果たすこととなる。

その後、東京に千代田瓦斯株式会社が設立され、日本のガス事業系統は、ますます複雑怪奇なものとなってきた。

同社は、東京市から「市の所有または管理する道路・橋梁・堤塘（つつみ）・公園・その他の工作物に対し、営業上必要なる特権を付与せられ、同時に、千代田の存在中は市自らガス事業を經營せず、また新たにガス会社を設立せんとするものもあるも、道路使用の特権を付与せずと云ふ、会社に取りて甚だ有利なる条件の下に」明治四十年二月十三日許可されている。

その資本金は公称一千万円・払込済二百五十万円で、福岡市の福岡電気軌道株式会社を設立し、また日本瓦斯を発起した財界の名物男「福沢桃介」が創設、東京瓦斯に挑戦した。その結果明治四十年六月には

東京瓦斯・千代田瓦斯の両社は、単に営業上の競争に飽き足らず、各協会を設立し、党を樹て派を分ち全国の斯界（この方面。ここではガス業界）を風靡せしめんとしつゝあり。即ち、横須賀・仙台・北海・日韓瓦斯等は東京瓦斯に属し、名古屋・京都・豊橋・韓国瓦斯は千代田瓦斯に属し、大阪・神戸等は目下中立の位置にあり。

此外福沢桃介・松永安左衛門一派の日本瓦斯に属する鹿児島・新潟・熊本等あり。且又九州に於ては四月末九州瓦斯協会設立されたが、之等は何れに属する事もなければ、系統よりすれば当然千代田系に属すべきものなりと云ふ。

猶聞くところに依れば、千代田系は総べて技術者を網羅（残らず収め入れる）し居りて、東京瓦斯系は重に瓦斯営業者を抱蔵し、其間多少協会の意味を異にすれども、両社競争の余に出でたる對抗策たる事は無論にして、新進鋭の当業者は重に千代田系に投入するの傾向ありと云ふ。

という有様となった。

しかし同社は、明治四十四年七月七日点火したものの、同年十二月二十七日東京瓦斯に合併された（明治事物起源）。

明治四十四年四月組織された「九州瓦斯協会」（参照、十二項）も、ガス事業系統の再編成に大きな波紋を投じ、大正初期の九州地方ガス事業大合同のキッカケとなっているようだ。なお同協会は、日本瓦斯の福沢桃介、同社発起人の一人で大牟田瓦斯取締役の松永安左衛門が参加していることから考えて、日本瓦斯福沢一派（松永は福沢の後輩で親友）の西日本地区ガス事業大合同への布右の第一歩と言う気がする。

△注▽大正に入り、日本瓦斯系会社が合併、西部合同瓦斯株式会社が誕生した。

十五、地方ガス事業の欠陥

日本の地方ガス事業は、今まで述べてきたような特殊な性格を持って生まれてきた。この性格には、当然のことながらいろいろな欠点が付随していた。本項ではこの欠点について考えてみようと思う。

本論に入る前に、まず小瓦斯会社で成功したものについて、何故成功したかを見てみるべきだと思うが、その好例一宮については既に十三項で紹介したので、ここでは触れない。

日本のガス事業は、東京・横浜・名古屋・大阪などの大組織のものによって計画され、大会社から派遣された技術者たちは、その多くが大会社の経営をそのまま小会社に当てはめようとした。これではうまく行く筈がない。このことについては、日本瓦斯株式会社顧問・青木止貞が、「工業之大日本」明治四四、一、一号で、「統計なき我瓦斯事業」と題して述べた文があるので、この文を借用して説明に代える

ことにする。

経済学者ワグナーは、統計を以て將に遂行さるべき行為の予算だと言ふた。実に千古の金言だ。

近年勃興しつつある瓦斯事業に対しても、完全なる統計のないのは全く予算がないと同じ事だと思ふ。若し何等かの統計を尋めんと欲せば、東京・横浜・神戸・博多・大阪、而して最近に於て名古屋を加へて此六会社の報告に依らねばならぬ。夫れも個々の報告であつて、材料の不備は、到底満足なる統計上の平均数に達する事は出来ない。又余輩寡聞にして、今日までは是等の統計に付て正確なる報告ある事を聞かない。其上此営業報告なるものは、元来余り重要視する事の出来ない性質のものであるから、此中から一定の規則を見出す事は絶対に至難の業だ。即ち、近代統計学上の要求たる中央集権の統計に就ては、絶無と云はなければならぬ。其理由とする処は、我瓦斯事業が未だ幼稚の域を脱せず、既設会社の数も少なく、従て大量観察に付て其材料を得られないからである。

然らば現今起りつつある瓦斯事業は、何を標準として企画されるかと言ふに、所謂一箇現象の観察に満足して居るのだ。即ち偶然現象の飾を追ふて樂觀し夢想しつゝあるもので、事業の発現上及成立上、何等の定則に則らざるが故に、實際に於て、事業の危険を予想する事が寧ろ当然である。幸ひ今日まで危険の事実が発表せられないから、誰れも此事に言及しないが、此儘に進むならば、余は早晩何等かの恐慌を見る時代が来る事と信ずる。

何故に是れが必要的現象でないかと言ふに、日本の瓦斯事業に系統のある事が第一の証拠だ。即ち新瓦斯会社の企画者は、只一個の現象を観察して、直に之に依頼する。言ひ換ゆれば、大阪がよいと思ふものは大阪に依頼する。名古屋が良いと思ふものは名古屋に依頼する。依頼するといふのは設計其他に付て既設会社の指揮を仰ぐ

ので、やがて、是れが大阪系とか名古屋系とかになるのである。勿論其間資本の關係もあるが、それは問題でない。仙台・静岡・門司等が東京系たるが如く、広島・堺が大阪系たるが如き、一ノ宮・津島・浜松等が名古屋系たるが如き、明かに這般（そのへん）の事情を説明して余りありだ。是れ等は取りも直さず一箇現象に満足した結果だと言はねばならぬ。斯る事業の成り立ちから判断して、其事業が危険であるといふのは、決して無理ではあるまい。

殊に余が主張する、實際日本の瓦斯事業の本位たるべき小都會の瓦斯事業に対しては、此偶然的現象より觀察する事が出来ない。然るに、既設の大瓦斯会社の報告より得たる幾分の統計を以て、是等の小瓦斯会社をも支配し得る法則であると思考するのは、大なる誤解だ。

大瓦斯会社と小瓦斯会社の間に、何程の交渉があるか。勿論技術上の諸問題、即ち石炭・噸より産出する瓦斯量・コークス・タール等に付ては、何如までも共通たるべき性質のものである。然るに其の共通たるべき主要部分に於ても、大会社と小会社の間には幾分の差を認め、タールの精製とかアンモニアの精製とかいふ問題は、大瓦斯会社の特有で、小会社は此恩典に浴する事が出来ないのである。従て利益の点に於て、既に一部の欠陥がある事を知らねばならぬ。又営業上の諸問題、即ち需要家一軒に対する瓦斯消費量・点灯及炊事の口数・鉄道壱哩に対する需要家の数等は、地方的事情に支配されるもので、其間大会社と規を一にする事は出来ない。且つ経営の方法に付ても、全く特種事情の存在を認むるので、大会社の経営と離れて研究すべき多大の問題がある。

然るに往々にして、依頼されたる大瓦斯会社の技術者・経営者は、自己の事業の成績・統計を以て一般的なるものと誤信し、直に是れを小会社に応用せんと企てる。是れ即ち偶然現象を必然現象の如く

く愚考するより来る誤解で、要するに完全なる統計がないからだ。是れは甚危険なやり方で、現に其実例はいくらもある。否将来沢山見る事が出来ると思ふ。

勿論其内に良好なる成績を得つゝあるものもある。是れは責任に当るものが、小瓦斯会社経営に特別の頭腦を有するからで、余は一般に此特別の思慮を費す事を希望するのだ。

然らば将来起るべき、否今や起りつゝある、凡ての小瓦斯会社の前途は、悉く悲觀すべきものかといふに、決して左様でない。余は只単に、「統計を有せざる事業」であるから、細心の注意と特別の経営を要する事を一言したのである。

この文にもあるように、小さな会社でも成功した例もある。たとえば、前述した一の宮や、博多その外名古屋系の津島・豊橋など。しかし反面、金沢電気瓦斯株式会社（明治四三年一〇月ころの日本で、唯一の電気ガス兼営）のように、興業費十万円を投じ一日十立方呎の機械を設置しながら、実際には一日二立方呎の需要しかなかったひどい会社もある。これほどひどくはなくても、これに類するお粗末な計画が多かったことが、第一次世界大戦中多くの小ガス会社を破滅へと追いつた原因となった。

これら不良ガス会社が、設立後しばらくは持ちこたえられた原因の一つに、不況時に設立されたため、石炭価格が安かったことが挙げられる。しかし消滅した会社の多くは、将来の高炭価に対する準備はしなかったようだ。これに反し、好成績を持続した東京瓦斯は、明治四十三年既にその計画を立てている。以下「工業之大日本」明治四三、九、一号の記事を引用しよう。

瓦斯発生用には、東京瓦斯が多年の研究上夕張炭を第一とし、充分な分析試験により見れば留萌炭を第一とするが如きも、灰分及包硫黄分多くして瓦斯釜の腐蝕を速かならしめ、瓦斯産気の利益より

も損害の大なるために、揮発瓦斯及び固定炭素の比較的多き夕張炭を最上位とするに至ったので、此は一般瓦斯事業家の首肯するところであるから、由来夕張炭に対する需要はますます増加するは明白である。

今東京瓦斯が消費する石炭量は一日三百噸であるが、現在の如く炭価低廉な際は、瓦斯の生産費も従って少なく会社は好都合なるも、一朝財界活気を呈し来らんか、石炭の需用頓に増加し、其価格の騰貴を見るは必然の成行であるから、同社は近く炭山を所有するの計画を立て、夕張炭山の買収に関し交渉しつゝありたるが、漸く調談を見るに至りしを以て、石狩石炭会社は六月の総会に之に関する議案を決議した。而して瓦斯会社にては、石炭山買収の後、差当り自ら之を経営せず、石狩石炭会社と同炭山を賃貸し、並に瓦斯用石炭の買入価格に関し長期契約を結ぶ筈である。東京瓦斯会社が此の計画を立てるに至りたるは、時期遅れたりとは云へ、尚ほ其明を称するに足るのである。

この外、一の宮のガス事業の所で述べたガス器具の統一問題や、機械の輸入問題などがあるが、後述するのでここでは触れない。

また、明治時代における地方ガス事業の欠陥として、ガス副産物利用問題がある。東京瓦斯では、既に明治三十四年六月副生物精製所を設置（参照四項）しているが、地方ガス事業では、ガス産過程で自然発生的に取れるコークス・コールタール・アンモニア液があった程度で、しかも、これを全部販売してはいなかったようだ。もともと、東京瓦斯のガス副生物精製と言っても、その内容は四項で述べた程度で、至極原始的なものだった。

付け加えて置くと、第一次世界大戦までは、欧米でもドイツ以外は東京瓦斯と大した違いはなく、そのため、開戦と同時にドイツの化学製品供給が杜絶し大いに苦しんでいる。

（以下次号）

（二九頁より）
ン、又同月中外国汽船及び外航日本船の燃料炭積込高は一〇、五三三
トンにして十月に比し五、〇〇〇トンの減少なり。

大正三年十二月六日 唐津炭貯炭増加

別項の如く唐津港の輸出不振なる一方山本よりの着炭は却て増加せるを以て各月末に於ける西港の貯炭は六八、九一八トンにより十月末に比して頗る増加せり。而して同港は全集炭の九割まで三菱の掌握せる丈け貯炭も亦三菱の分五四、〇〇〇トンに上り三井は一四、〇〇〇トンに過ぎずと。

大正三年十二月八日

松島炭鉱株式会社 第四期（自大正三年五月至全年十月）決算報告

貸借対照表

貸方	貸方
株 金	二、〇〇〇、〇〇〇・〇〇〇 円
積立金	三三、〇〇〇・〇〇〇
借入金	五〇〇、〇〇〇・〇〇〇
預 金	二二、七三一・六九〇
三井物産株式会社	三八、九六三・四四〇
前季繰越金	一一、〇五一・一九七
当期利益金	一〇五、〇四四・一七三
合 計	二、七一〇、七九〇・六〇〇
借方	
起業費	二、五七六、七六六・三六二
貯蔵物品	三〇、三八七・六〇五
石 炭	一一七、七五三・〇五五
未決算	四五、四七四・九一八

（二五五頁へ続く）